〔倭訓栞前編二十七倍〕へた　日本紀、萬葉集に、海邊をよみ、又邊をへたと訓せり、はたと通ず、澳に對しいふ也、伊勢阿濃の津に部田あり、海濱也、萬葉集に、淡海の海へたは人ゑるおきつ波、とよめる是也、後撰集に、何せんにへたのみるめをおもひけんおきつ玉もをかづく身にして、

〔古事記傳十七〕海邊は宇美辨多と訓べし、書紀に、海畔、古今集三戀に、世をうみべたに云々とあり、萬葉十二丁廿に、淡海之海、邊多波人知、後撰集に、へたのみるめ、

〔古事記上〕於是其弟泣患居海邊之時、鹽椎神來問曰、何虛空津日高之泣患所由、〇下略

〔日本書紀十四雄略〕二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、〇中略崩于大殿、〇中略是時征新羅將軍吉備臣尾代、行至吉備國過家、後所率五百蝦夷等、聞天皇崩、〇中略乃相聚結侵寇傍郡、於是尾代從家來會蝦夷於娑婆水門合戰、而射蝦夷等、或踊或伏、能避脫箭、終不可射、是以尾代空彈弓弦於海濱上射死踊伏者二隊、〇下略

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕寄物陳思

淡海之海、邊多波人知、奥浪、君乎置者、知人毛無、

〔後撰和歌集十雜五〕志賀のからさきにて、はらへしける人のしもづかへに、みるといふ侍けり、〇中略

くるまよりくろぬしにものかづけける、そのものこしにかきつけて、みるにをくり侍ける、

くろぬし

なにせんにへたのみるめを思ひけんおきつ玉もをかづく身にして

〔書言字考節用集乾坤一〕沖韵瑞、通搖也、又深也、澳同

〔倭訓栞前編四十五於〕おき　海のおきは、日本紀に、瀛字、古事記に、澳字を用ゐたり、奥の義也、澳字は龍龕に見えたり、沖をよむも深也と注せるをもて也、川にもおきとよめる事、萬葉集、古今集に見えたり、